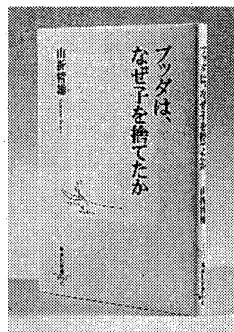


ブッダは、なぜ子を捨てたか

山折 哲 雄 著



る。

シヤカの歴史

的実像を容易に
確定できない以
上、その旅は想
像力を要する
旅となる。著者

著者の本書執筆の動機
は明快かつ挑発的だ。

「ブッダが、どこにもい
ないからである」と。ブ
ッダがこの世を去ってか
ら二千五百年もの月日
がたった今、この日本の
地において、ブッダはな
おも生き続けていると言
えるのだろうか。このよ
うな批判的問いかけを
自らに向けながら、著者
は人間の苦悩を抱えたシ
ヤカと、悟りを開いたブ
ッダの両者とともに二人
三脚の旅を始めようとす

は、想像力を奮い立てる
起点としてシヤカの「子
捨て」に注目する。これ
は古く、かつ現代的な課
題だ。豊かな社会の中で、
現代人は子育ての大変さ
を知り始め、結果的に、
子どもをつくりたくな
い、子どもにわずらわさ
れたくないという「子捨
て」の思想が広がってい
ると語る。その問題の深
部を探るため、著者はな
ぜシヤカが自らの子ラー
フラを捨て、家を出したの
かに考えをめぐらしてい

生々しく人間的な姿、彷彿と

く。

文献学的な検証ができ
ない以上、著者が描くシ
ヤカの姿が正しいのかど
うかの判定を下すことは
できない。しかし、著者
の想像の旅に付き添って
いくと、シヤカそしてブ
ッダの生々しく人間的な
姿が彷彿(ほうふつ)と
してくるはずである。

人間は死んで無に帰する
のではなく「仏」になる
と考えたからだ。

神仏習合、本地垂迹(す
いじゃく)説、先祖崇拜、
葬式仏教といった日本の
宗教的特質を考える際の
キーワードが、仏教を軸
に見事に整理されてい
く。気の遠くなるような
時空を闊歩(かっぱ)し

さらに著者が誘う旅は
インドを離れ、日本へと
向かう。著者は日本の仏
教はインドの仏教から大
きく変容したことを明確
に述べる。インドの仏教
が「無我の仏教」である
とすれば、日本の仏教は
「無私の仏教」であると
いう。日本では「我」の
否定より「心」の浄化に
向かったのであり、また、

求の旅に付き添っていく
ならば、読者はきつと、
喧噪(けんそう)な現代
社会のただ中であって
「わが身を」とのえて、
林の中でひとり楽しむ
というブッダの声を聞き
遂げられるだろう。

(小原克博・同志社大教
授)

(集英社・七二四円)